

# 下沢 保躬（しもざわ・やすみ）

## 1、プロフィール

幕末・明治の激動期、下士の貧窮に耐えながら、国学・歌道に専心し、旧派和歌を近代に生かし、文芸資料を広く編纂、また旧藩時の歴史をまとめ新政府の修史に資した。

<生没>

1838(天保9)年6月 16 日 ~ 1896(明治 29)年6月 29 日

<代表作>

『明治花月歌集』

<青森との関わり>

天保9年6月 16 日、弘前藩士鷲蔵の長男として生まれる。

## 2、作家解説

閑齋・鏡湖楼などと号す。天保9年6月 16 日、弘前藩士鷲蔵の長男として生まれる。13 歳、則田溪斎の塾で四書五経を読み終え、18 歳、歌人長利仲聴に入門。安政4年学問に志し上京するも発病、やむなく帰郷。6年箱館陣屋詰となり居ること1年余。 国学は、鶴谷有節らとの交流により、文久初年までに本居・平田門の書を学んだが平田鉄胤に入門したかどうかは不詳。元治元年、砲術師範篠崎進の門人となる。慶応3年、小人 20 人仰せつけられ掃除小頭代として上府。

明治2年、京都出張所公用方取次、ならびに筆生を命じられ、近衛家執事を兼ね、近衛忠熙の歌道門弟となる。4年小山内梓、伊藤勘九郎とともに弘前藩神社・仏閣の調査に当たる。

6年岩木山神社の神官となる。同年全国民に新年勅題詠進の道を開くよう、宮内卿に建白し、翌年採択され、その旨の布告があった。

9年、旧藩主の命により、兼松石居・樋口建良とともに『津軽旧記類纂』（全巻 30 冊、付録3冊）を編集、脱稿。11 年、同書を校訂浄書、旧藩主が修史局に奉っ

た。次いで同様にして『津軽旧伝記類』(全 20 冊)を編集した。また、『津軽古今偉業記』のほか、歴史・地誌・文学などにわたる著書・草稿が多くある。その中で『明治花月歌集』(明治 10 年)には税所敦子・高崎正風・八田知紀ら歌人の作が見られ、その交流圏を示している。「東海道の記」(明治 2 年)は古典的近代的の両世界の推移を伝え和歌的紀行文として佳調を持っている。草稿の、「津軽古今大成集」(4 巻)・「津軽古今俳諧大成集」(6 巻)は、特に前者は編成の作業中という状況であり、共に不整であるが、資料の渉獵は広範である。

明治 29 年 6 月 29 日病をえて没する。享年 59 歳。24 日作の辞世、  
「野を広み心のまゝに遊び行くたづに伴う身とはならばや」 保躬

### 3、資料紹介

#### ○『明治花月歌集』

図書

1877(明治 10)年 4 月

156mm × 228mm

明治 10 年 4 月発行。木版和装。編者は下沢保躬。発行人は藤沢徳兵衛。序、佐々木弘綱。旧派和歌集。凡例によると永禄以降明治の歌を集めたとある。直接手交の貴顕の歌、送られた佐々木弘綱・八田知紀・税所敦子・高崎正風ら、津軽以外の歌を含む。